

県研究主題

児童一人ひとりの生きる力をはぐくむ指導計画及び指導の工夫・改善

提案 1

提案者 栗城 誠一（相模原地区）

< 研究主題 >

子どもの「やってみたい」を膨らませ、共に創りあげる総合的な学習の時間を目指して

1 提案内容

(1) 実践校及び内容

市立広田小学校の4年生で、平成28年4～7月に実践された、学校近くの里山を活用した活動（里山散策・ホタルの幼虫探し・ホタル観賞会）について提案された。

(2) テーマ設定について

- ・自分たちの住む地域のよさに気付き、地域への愛着をもち、地域を大切にしていきたいという心を育てられるようにしたい。
- ・児童が自分たちで決めたことに挑戦し、苦勞を乗り越えてやり遂げた喜びや達成感を味わえるような、児童と共に学習を創りあげられるようにしたい。

(3) テーマに迫る手立て

① 地域の人材の活用

ア 協力者との出会わせ方 … 児童たちからの必要性、思いや願いをもって出会わせられるようにし、協力者とのよりよい関わりを構築させることができる。

イ 打ち合わせの充実 … 協力者に活動を理解していただくために行う。本提案は短期間の活動の実践だが、打ち合わせを複数回設定することで、教員が活動に見通しをもつことができ、活動に選択肢、広がりを持つことができる。

ウ 児童との関わり … 児童の気付きを促すために、「講師」として児童に教えてほしい場面と、「活動協力者」として一緒に活動を楽しむ場を分けて、関わっていただくようお願いをする。それで、児童の活動が学習となるよう、教員がある程度児童の活動や考えに予測を立て進めることができる。

② 学習対象との出会わせ方の工夫

ア 教員の教材研究の充実 … 経験のある教員との話、協力者との打ち合わせ、実際に足を運んでの見学などを行うことで、教員が教材を理解することができ、児童に「調べたい、行ってみたい」という思いをもたせることができる。

イ 児童への伝え方の工夫 … 画像で見せて視覚に訴えたり、体験談を伝えて親近感を与えたり、「今までの学年はしたことがない」などの言葉で特別感を感じさせたりすることで、児童の「やってみたい」という思いを膨らませることができる。

③ 地域素材を教材にした、体験学習の充実

実物に触れることができたり、気軽に何度も足を運んで関わったりすることができ、児童がその地域素材に親近感をもち、実感の伴った学習を行うことができる。また、児童の思いや願いに対応できるように、校内校外での連絡調整などの体制を整えることができる。

2 協議内容 「体験活動を通しての学習意欲を高める工夫」

(1) 地域の材「自然」の扱いについて

繰り返し地域と関われるもので、社会、理科ともリンクした位置付けをしていることは非常によい。今回の提案に関するだけでなく、低学年での「生活科」でしっかり地域探検を行うことで、教員の投げかけだけでなく、児童から地域に対する課題意識が出てくる可能性が生まれる。

しかし、今回の「里山」だけでなく、地域材として扱われる自然「川」などについて、安全性から近くで遊ぶ機会が少なく、身近に感じない児童もいるのが実態である。また、むやみに自然を扱おうと、自然を壊してしまうことになりかねないことや、ポスターによる自然保護啓発などで時間の経過に伴い、ゴミを減らしている実態もある。扱いには十分注意して、管理者など協力者との密な計画が必要となる。

(2) 「失敗」による児童の意欲の高まり

今回、ホテルの幼虫を捕まえる活動は、見つけられずに1回失敗している。事前の協力者との打ち合わせでもその難しさは伝えてもらったが、あえてその活動を取り入れた。そうすることで児童の活動に対する意欲を高めることができ、2回目を考える際、前回の失敗を生かした話し合いが進み、そこに児童の成長と主体性を感じることができるようになった。また2回目には卵や幼虫がどんなところにいるか協力者にも現地で教えてもらい、協力者の必要性を高めること、見つけた時の児童の達成感を強く感じることができるようになった。

3 まとめ

(1) 成果

学習対象との出会わせ方の工夫をすることを含め、児童の様子を考えながら学習の進め方について、学年の教員とその都度指導計画を練った。また、児童への声かけや学習環境について、随時相談し決めた。

すると、どの学級でも同じ方向を見て授業を進めることができ、教員がどのように児童に声をかけ、働きかけをするべきかが明確になった。その結果、児童が目標をしっかり持って活動に取り組み、目標を達成した喜びだけでなく、準備したことを生かして達成できたことを実感し、活動から新しい考え（価値）に気付く児童もいた。

さらに、協力者との関わり合いの中でも、児童の意欲を喚起する言葉を投げかけてもらえたことによって、児童の意欲が高まり、保護者を含めて活動に参加したり、放課後に里山を訪れたりする姿も見られるようになった。

(2) 課題

どの学級も同じ方向に進めようとするあまり、教員側の働きかけが増え、児童主体の活動が少なくなってしまうことが考えられる。常に児童から活動が進むように、授業を組み立てるのも重要な要素となる。

また、振り返りが「できたこと、やってどうだったか、またやりたいことは何か」など活動が中心になってしまった。今後の活動を更にステップアップさせるためには、児童自身が自分の成長を自覚できるものになるよう、毎回視点をもって行う必要がある。

< 研究主題 >

主体的な活動を促す年間カリキュラムの立て方

～総合的な学習の時間で変わる学校・変わる授業・変わる子ども～

1 提案内容

(1) 変わる学校

① テーマの決め方に不安があった。どのように決めたらよいのか？

→学校として「どんな子どもを育てたいか」を教職員が共有

↓
重点目標を設定

↓
縦系列で配置

前年度に・・・
長所と短所の洗い出し

② 年間カリキュラム作成の仕方

- ・他教科との関連付けを意識し、学びを深めていく。
- ・カリキュラムソフトを活用し、教科横断的に学ばせたい内容を考えながら、カリキュラム作成を行った。

3年 身近なはてなを調べよう
4年 福祉について調べよう
5年 環境について考えよう
6年 命について考えよう

(2) 変わる授業

① 実際の授業

- ・児童に、事前に活動のゴールや活動にあたっての提言を示した。
- ・「平和ではない」ということを切り口に、平和について考える設定で進めた。

② 「種を植える期間」の設定

- ・「平和」は大きなテーマなので、「テーマに関わる様々なことを、様々な教科で考えていこう」という内容を投げかけて行った。
- ・ゲストティーチャーをより多く招けば、知識だけでなくその後の調べ学習も有意義になる。

③ グループングとテーマ決めについて

- ・児童によって、興味をもつ内容は様々で、クラスを越え学年でグループングを行った。児童自身が、本当に興味をもったことが探究できるようにした。

④ 情報収集

- ・収集手段を本・手紙・アンケートなどを提示し、有効と感じた方法により行った。

⑤ 発表手段の選択

- ・様々な手段を選択し、長所と短所を考えた上で、自ら選択した。

(3) 変わる子ども

- ・自分なりの考えや思いを、振り返りに書くことができた。
- ・しっかりと友達の話聞き、メモを取る姿が見られた。
- ・話し合うことにより、相手意識を持ったり、思いを共有したりする力が付いた。

2 協議内容

○ 質疑応答

Q 発表手段の長所・短所は、児童自身から出たものか？

A 一つの方法だけでは効果的ではないと、児童自身が気付いた。

Q なぜ「平和」を学ばせたいのか？児童にはどのような必要感があったのか？

また、体験的な活動はどのようなことを行ったのか？

A 体験的な活動が少なかった。また「平和」というテーマは、学校全体でどんな未来をつくるか考えたとき、6年で学ぶ学習内容から「命」が出てきた。

しかし、より児童にわかりやすくするために「平和」と設定した。

Q 「いつも『何のため』を考える」ところに戻る手立ては？

A 総合的な学習の時間だけではなく、どの授業でも「何のためか」の意味を教員が声かけを行うことでできた。

○ 総合的な学習の時間を通して、最も児童に考えさせたいのは「自己の生き方」だが、なぜ発表しなくてはならないのか？切実感は？発表のための学習ではないのだからとの意見も出た。

Q VTRに出てきたテーマは、6年の発達段階としてどうだったのか？声に出したからいいというものではない。人としての尊厳にかかわる内容だと思う。

A 教員自身が講演会を聴きに行き、研修を行った。また、教員として違和感はなく、児童は資料を見る過程などから理解ができたが、重いテーマではあった。

3 まとめ

・学校全体の取り組みが進めば、今後他の学校も普及していくことが考えられる。「未来を創る」をテーマに据えた取り組みには、共感がもてる。ただ「どんな未来を創りたいか」を考え、それに迫るために「福祉・環境・命」で果たしてよいのか。

また、児童にとって、「いつも何のためを考える」ということを、児童にアピールすることは少し重いのかもかもしれない。総合として「探究活動のスパイラル」になっているのか？

→「福祉・環境・命」の視点で、「探究」になっているのか、検討の余地はある。また「スパイラル」の視点では、「探究」になっているのか、検討の余地はあるとともに、「まとめ・表現」は「発表」だけではなく、自分の日常にどう現れるかも含めて「表現」と捉えられる。

・グルーピングもよいが、一人でやり抜くことも大切。やり抜く力は生きる力につながる。

<全体協議> 「探究的な学習としての充実を図るための指導の工夫」

- ・自分事として興味をもつような材を扱うことで、魅力的になり、関わりや広がりを見せる。
- ・材を通して、イメージからのずれを見出し、解決していくうちに探究的になっていく。
- ・教員が、児童の思いをどう共有するのが重要になる。
- ・活動ばかり見ていると、児童の姿が見えなくなる。何に気付かせたいのかをどのように見取るかが大事。児童の姿をイメージすることが必要となる。
- ・児童が1, 2年の生活科で地域に浸ることにより、総合的な学習の時間につながってくる。
- ・児童が気付くには教員がわかることが大事で、研修等で地域に出ることが必要である。
- ・体験や学びは言語活動を通じて、学習を深めるためには児童の目線から見る力が必要である。「同じです」でなく「関連して」の発言で、教科学習からの発展により学びを進める。
- ・見通しをもつには、学校としての計画、単元計画が大事。内容が決まっても、教材への出会わせ方により変わってくる。
- ・目的として発表ありきでなく、学習者として、もっと知りたいと思う展開にしていきたい。
- ・工夫に関係するのは、教材研究と情報に関する技術的指導になってくるのではないかと。
- ・探究に必要なのは、材との出会わせ方、ゲストティーチャー、グルーピング、キーワードの活用というところがポイントと思われる。